

月見櫓周辺の発掘調査を実施しました



写真1 発掘された月見櫓（東から）

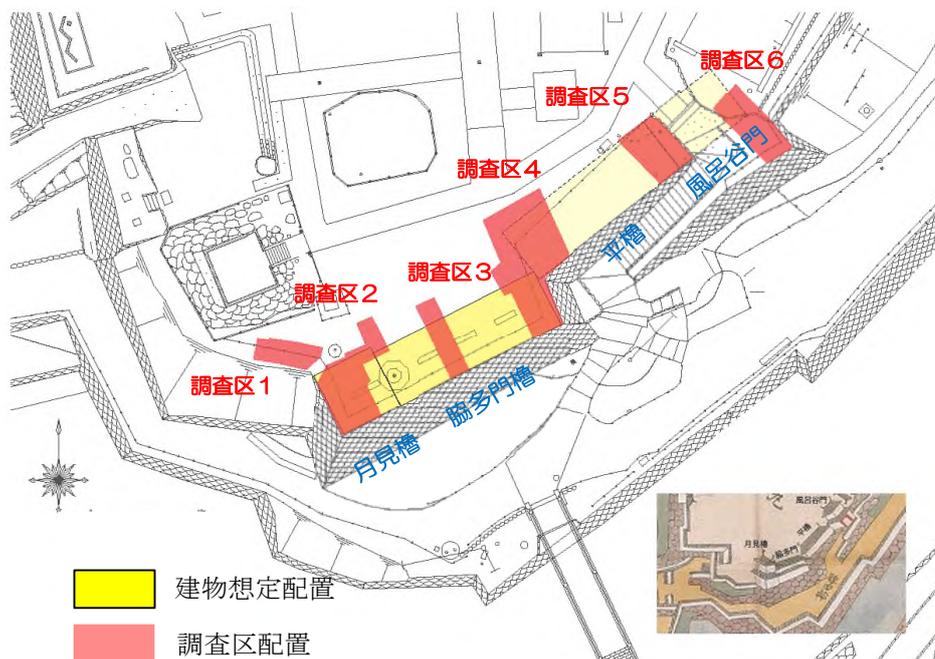


図1 現況平面図と調査区配置図

『岡崎城跡整備基本計画 - 平成28年度改訂版 - 』(H29.3)の策定を受け、今後岡崎城跡の整備を検討するための基礎となる岡崎城の城郭遺構について、積極的に調査研究を進めていきます。この調査研究の一環として、今回、月見櫓およびその周辺の発掘調査を実施しました。

今後も岡崎城内での発掘調査を継続的に実施していく予定ですので、調査成果等について「岡崎城だより」にて紹介していきます。

今回は月見櫓発掘調査の成果を紹介します。

1. 月見櫓の立地

月見櫓は天守のある本丸の南端に立地します。南方を遮る建物がなく月見にはよい立地であるとともに、眼下には「風呂谷曲輪」の狭い通路を見下ろす位置にあたることから戦時には防衛の拠点ともなる立地です。そのため、月見櫓の東側には防御施設となる脇多門櫓、平櫓、風呂谷門が続きます。

2. 絵図等に見る月見櫓

●前本多家時代（江戸時代前半）

建物配置を描いた絵図によれば、2階建ての建物と脇多門櫓が描かれています。

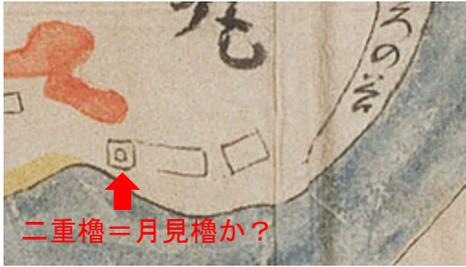


図2 前本多家時代

2階建ての建物が月見櫓であれば江戸時代の初めには存在していた事になります。ただし、古写真の月見櫓が江戸時代初めからずっと建っていたものとは考えがたいです。

●水野家～後本多家時代（江戸時代前半～末）

水野家時代には二重櫓が描かれており、月見櫓である可能性が高く、後本多家時代の絵図（1781年写し）

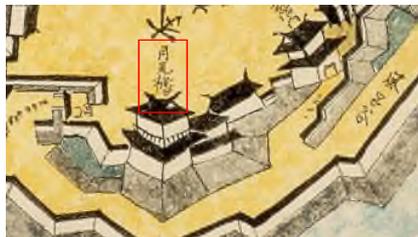


図3 後本多家時代（1781年写し）

に「月見櫓」と明記されるものがあり、江戸時代後期には月見櫓として確実に存在したといえます。また、脇多門櫓（二重櫓）、平櫓、風呂谷門も描かれており、詳細がよくわかります。

●描かれた月見櫓

江戸時代後期の岡崎藩士・松下鳩台（1771～1849）により月見櫓が描かれています。月見櫓



図4 松下鳩台の描いた月見櫓（後本多家時代・江戸時代後期）

は重箱櫓（総二階造り・1階と2階の平面が同規模）であること、屋根の両端には鯨（しゃちほこ）が載ること、2階には高欄が表現され月見の場であったこと、1階には窓や防御用の狭間があったことなどが分かります。

脇多門櫓も二階造りで、同様に鯨を載せるが月見櫓のような開放的な空間はなく、壁に四角い窓（狭間）が描かれるのみで、防御施設としての櫓となっています。月見櫓西側に延びる塀は曲輪の地形に合わせて折れながら延び、壁には狭間が切られています。

●記された月見櫓

明和7年（1770）の「書上文書」（城主が松平から本多に交代した際の引き継ぎ書）に城内の建物の規模が書かれている。これに月見櫓と脇多門櫓の規模も明記されています。

月見櫓：桁行3間1尺（約5.7m）

梁行3間2尺（約6.0m）

脇多門櫓：桁行9間（約16.2m）

梁行3間（約5.4m）

※書上文書の「二階門」「同所脇多門」が風呂谷門と平櫓にそれぞれ該当するか検討中。

3. 古写真に見る月見櫓

廃城令により解体される前の姿を写した古写真（明治5年頃）からは、重箱櫓で2階の南半が板戸で開放されていることや、高欄が廻ること、1階は格子窓や狭間があることなどがよくわかります。



写真1 明治5年（1872）頃の月見櫓

松下鳩台の描いた月見櫓（図4）と特徴がよく似ることから、古写真に写る月見櫓は少なくとも江戸時代後期には建てられていた可能性が高いといえます。

その他、月見櫓西側（写真左側）には塀がなく、月見櫓東側（写真奥）には脇多門櫓もないことから、それぞれ月見櫓とは解体時期が異なる可能性が高く、江戸時代末期に既になかった可能性もあります。

4. 発掘調査成果

調査区 1

月見櫓の西側に位置し、絵図では月見櫓から延びる塀（土塀もしくは築地塀）が描かれています。

調査では塀の痕跡は確認されませんでした。調査区東端部にて月見櫓北辺の基礎石積みと思われる石列が確認されました。



写真 2 調査区 1 全景（東から）

調査区 2

月見櫓想定地を調査しました。月見櫓の西辺、南辺は石垣であり、これが櫓台となっています。櫓台石垣の天端面には建物土台の木材を載せるために石材を平滑に加工した痕跡が確認されました。



写真 3 櫓台石垣の加工痕跡（東から）

月見櫓北辺、東辺は現状では石垣等の櫓台は認められませんが、調査により月見櫓東辺の基礎石積みが確認されました。さらに調査区外へと延びることから北辺との接点は確認できませんでした。

調査で確認された月見櫓の規模は、東西（桁行）約 6.2m、南北（梁行）（調査区 1 で確認した北辺石列で計測）8.7mを測ります。「書上文書」と調査数値を比較すると、東西は 0.5m、南北は 2.7m大きくなり齟齬が生じます。建物の増改築等による拡張も可能性として考えられるため、今後も検討が必要です。

また東辺では脇多門櫓の北辺の基礎石積み列も確認され、脇多門櫓との接続部が確認されました。

調査区 3

脇多門櫓の中央部よりやや西側にあたります。建物北辺の基礎石積みと石組溝を確認しました。基礎石積みは 2 段積みで、高さ約 45 cmを測ります。櫓台石垣の天端から基礎石積みまでは約 5.1mを測り、書上文書の 3 間 (5.4m) よりやや小さいことが分かります。



写真 4 調査区 3 全景（北から）

石組溝は排水用と考えられ、底面も石材が敷かれその上に小礫が敷き詰められています。基礎石積みから石組溝の中心までの距離は約 1.0mを測り、屋根の雨落ち溝としては近接することから、軒下に位置する排水溝と考えられます。

調査区 4

脇多門櫓北東端部と平櫓西端部にあたります。脇多門櫓の基礎石積みと、これに平行する石組溝が確認されました。脇多門櫓台石垣の天端から基礎石積みまで（南北）は約 5.3mを測ります。脇多門櫓の東面と調査区 2 で確認した月見櫓との接点まで（東西）は 16.2mを測り、いずれも書上文書の数値とほぼ一致します。

平櫓の基礎石積みは確認できませんでしたが、脇多門櫓北辺に巡る石組溝が北に折れ、さらに東に折れている状況が確認されたことから、平櫓沿いの石組溝であると考えられます。平櫓の櫓台石垣から石組溝までの距離（南北規模）は 4.5mを測ることから、脇多門櫓よりも一回り小さい梁行規模が想定されます。



写真 5 脇多門櫓・平櫓（西から）

調査区 5

平櫓の東端部と風呂谷門西側の接点部分にあたり
ます。調査区北側にて石積みを確認しましたが、平櫓
の基礎石積みであるかは不明です。この石積みの北側
では、調査区 4 で確認した石組溝の延長部は確認され
ませんでした。

また現状の通路西側の石垣背後からは現代の遺物が
混入することから、公園整備で積み直された可能性が
あり、近世の石垣ではないものと思われます。



写真 6 調査区 5 石積み (北から)

調査区 6

風呂谷門の東側にあたり、現状では現代の加工痕の
残る大型石材列があります。この新しい石列の下に、
近世の石垣が検出されました。石垣は 2～3 段残り、
上部にも石が積まれていた可能性が高いです。石垣は
2 度折れ曲がるため風呂谷門前面の桁形に関連する
石垣と考えられますが、調査区内だけでは確かなこと
はわからず、さらに周辺部での発掘調査による検証が
必要です。



写真 7 風呂谷門石垣 (南西から)

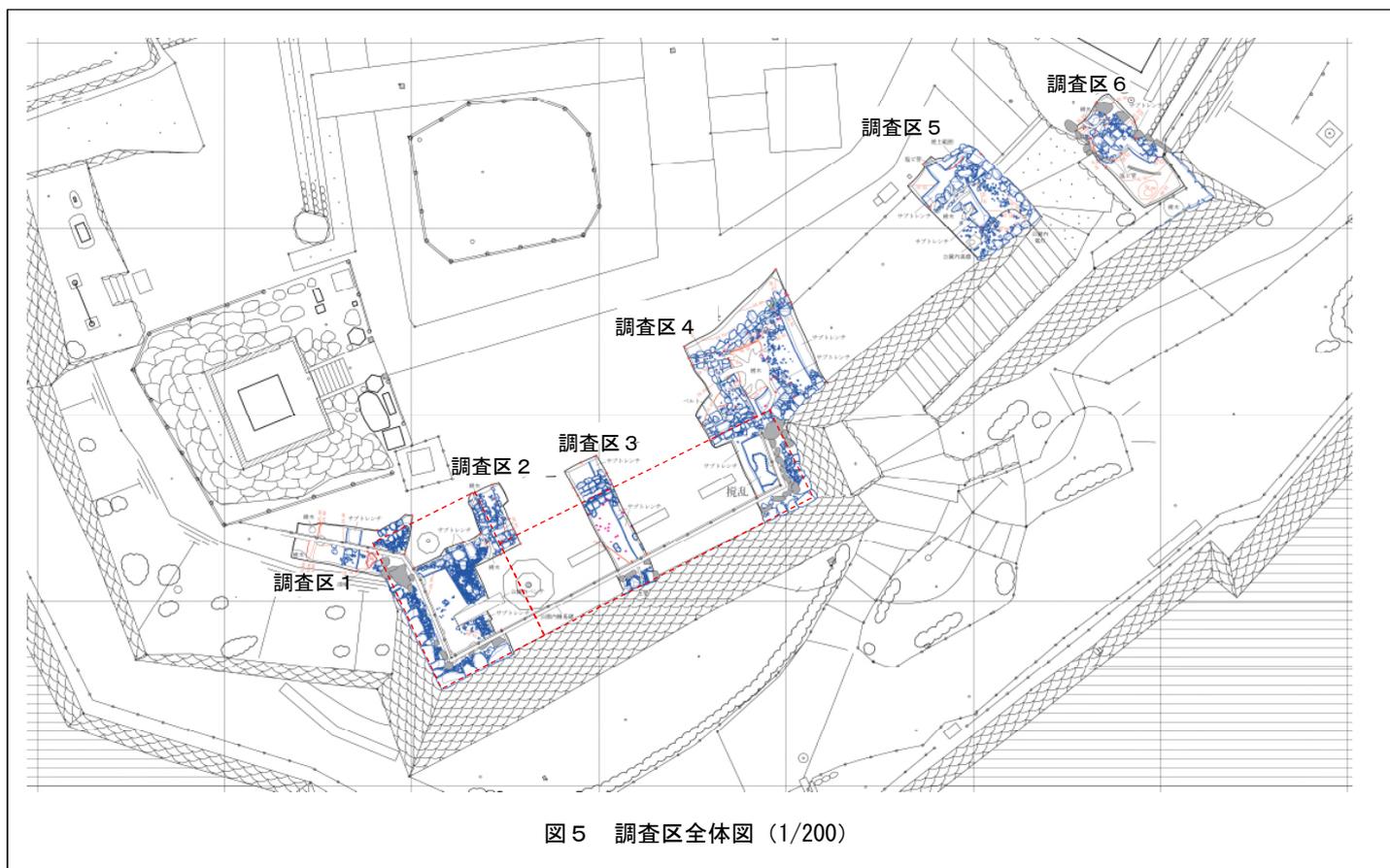


図 5 調査区全体図 (1/200)

岡崎城だより No. 1

発行年月日 平成 29 年 11 月 15 日
編集・発行 〒444-8601 岡崎市十王町 2-9
岡崎市教育委員会社会教育課
TEL : 0564-23-6177